

書物逍遙

阿部公彦



二〇二〇年の初めから世界中に新しい病気が広がり、私たちは半ば強制的に「巣ごもり」を強いられました。まさか……と誰もが思ったことでしょう。ただ、人文系の勉強をする人間にとって「こもる」のはふつうのこと。本を読んだり文章を書いたりするのに、何日どころか何週間も部屋から出ないことはあります。だから、正直言うとうちは「この巣ごもり、私たちはいいけど、ふつうの人は大丈夫？」との余計な心配をしました。

でも大丈夫。力強い声が届きました。「外出できないのは困る。でも、ちょうどいいや。本を読もう！」というのです。実際、書籍の売り上げは一割増しだとかよかった。それなら安心です。コロナは恐ろしい病気だけど、「読書」は生き延びた。

とはいえ、ひとつ懸念があります。本を読むのはたしかに身体を動かさないし、家の中でやれそうだけれど、ほんとうに「頭」だけでするものなのか。身体はいらないのでしょうか。

学生時代、英語の詩を読みはじめた頃のことをあらためて思い出します。私はまだ語学力もおぼつかなかったので、丁寧な注がついている版を買うため、大学の帰りに渋谷の大盛堂に寄り、古い細いエスカレーターで上の

読書とからだ

方の階までのぼって、研究社の英文学叢書などを少しずつ買い揃えました。上島建吉先生が編集した『ロマン派詩選』もそんな中の一冊でした。

ロマン派でもたとえばブレイクの詩などは、イメージのまぶしさに幻惑され「体」を忘れることがありますが。キーツなども修飾語の舌触りがあまりに甘美で、食事でもしている気になる。お口の運動だけで事足りる。でも、シェリーやワーズワスとなると、運動感覚を助けにしないとなかなか言葉の世界に入っていけません。ワーズワスは深い思弁に入ると、霧でもかかったように思考の道筋がおぼろになります。そのエッセンスは思弁を語る口吻そのもの。観念より、観念を差し出す前の、歩いたり走ったり見回したり興奮したりという振る舞いや、それに伴って生ずる呼吸、血流、熱気などの生理反応が大事なのです。

これらを受け止めるには、こちらも運動の中を生きたい。身体の調子が悪いとき、血流が滞っているときにワーズワスを読むと、同じ作品なのに全然反応できないことがあります。当時、私も戸惑いました。そしてワーズワスを読む前、読んだ後には、自然とよく歩くようになりました。そこには読みをめぐる「真実」があったのでしよう。「詩は自身の存在のあらゆる部分を使って読むものだ」という考えを私が教わったのは、『ロマン派詩選』を教科書にした上島先生の授業中でした。詩だけではなく、本もそうやって読むものではないでしょうか。

(東京大学大学院・人文社会科学系研究科教授)